中央アジア現地事情

カザフスタン国立中央文書館の紹介

野　田　仁

筆者は2002年秋から2004年秋まで財）平和中島財団の奨学生として、カザフスタン共和国のアルマトゥに滞在する機会を得た。この間、カザフスタンの近現代史を語る際に不可欠の史料を持つ同国立中央文書館 Центральный Государственный архив Республики Казахстан において作業を行ったので、ここにその概要を紹介したい。当文書館は、1921年にオレンブルグ県文書館を基にして設立された地方文書館を発端とし、29年にアルマトゥに移され、最終的に1957年に中央国立10月革命および社会主義建設文書館、中央国立歴史文書館、中央国立映画写真文書館の三機関が統合されて成立したもので、所蔵資料は130万点以上にのぼるという。

所蔵される文書は1917年のロシア革命以前と革命以後に大別される。著者が実際に作業したのはロシア帝政時代のおもに19世紀前半のものであるため、以下の記述も帝政時代に重点を置いていることを断っておきたい。革命以前の文書群は計770のフォンド фонд（基本分類）で構成されており、これらのフォンドについては館内備え付けの概要目録 реестр の参照が可能である。また次のガイドがある：Путеводитель по фондам досоветского периода Центрального государственного архива Республики Казахстан, Том. 1, 1995。これに従うと、内容に応じた13の区分がある。以下、その区分と主要なフォンドを示す。

1. 1868年の臨時規定以前の行政機関＝Ф. 4（オレンブルク国境委員会）、Ф. 338（オムスク州庁）
2. 1868年以降の行政機関＝Ф. 44（セミレチエ州庁）、Ф. 64（ステップ総督官房）
3. 司法機関
4. 警察・憲兵機関
5. 軍隊＝Ф. 46（セミレチエ州軍司令部）
6. 市議会など地方自治に関するもの
7. 財務省の機関＝Ф. 806（シベリア税関区長官房）
8. 農業国有財産省の機関

9. 鉱業関連
10. 郵便電信
11. 文化教育・日常生活
12. 宗教＝Ф. 387（セミパラチンスクの宗務庁）
13. 個人フォンドおよび地図＝Ф. 825（ステップ総督コルパコフスキー）

内容としては、西シベリアおよびオレンブルク総督府管轄下のカザフやクルグズに対する植民地統治の展開、ボケイ・オルダ史全般、中央アジアをめぐるロシアと清朝との関係（イリ問題、ヤークーブ・ベク問題、ドゥンガンやウイグルの移住）に関する史料を豊富に持っていると言える。特に19世紀後半から20世紀初頭にかけてのステップ総督府およびセミレチエ州関連の文書は当館に集中されている。ただし、関連する文書はオムスク州国立文書館をはじめ、その他の文書館（オレンブルグ州国立文書館、タシュケントのウズベキスタン国立中央文書館など）にも分散している所に注意する必要がある。所蔵文書の年代については、もっとも早いものは1732年であるが、18世紀のものは点数が限られており、19世紀のものも1822年以降のものが多くを占めている。

文書の整理のされ方は旧ソ連各国のそれと共通しているように思われる。基本的な文書史料の構成については［島田志津夫 「ウズベキスタンの公文書館事情」『イスラム世界』61、2003年、83-92］が参考になる。補足すると、基本的に案件毎に一つのファイルになっているが、各ファイル дело の先頭葉はそのファイル自体の目録 опись であることが多い。

当館の文書はロシア帝国の公文書が中心であり、その形式に親しんでおくことも必要である。通例として発信番号と発信者、宛先が明記され、これらは重要な情報である。また立場や内容の違いによって報告書 рапорт、上申書 представление などの区別がある。カザフのスルタンらとロシア当局間の文書も、言語の違いこそあれ、形式的には共通点が多い。

文書の言語については、ロシア語のものが多数を占めていることは言うまでもないが、テュルク語（タタール、チャガタイ語）、満洲語、モンゴル語などによる文書も含まれていることは注目に値するだろう。他に同国において革命以前の現地の文献を扱う機関として、国立図書館と教育科学省中央学術図書館があることを付記しておく。そこではロシア帝国内で刊行された文献以外に、カザフ人の残した19世紀後半以降の手稿本のコレクションを見出すことができる。

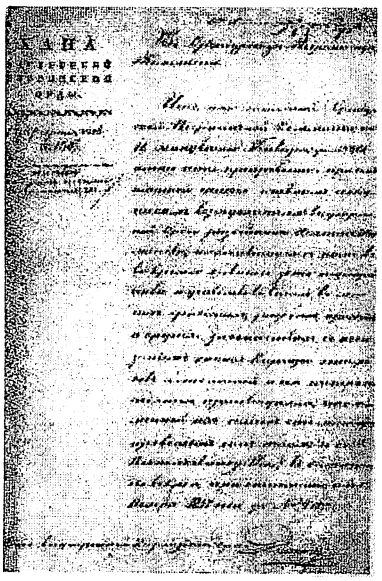
革命以降すなわちソ連時代の文書についてはウェブサイト（http://www.cga.kazarchives.kz/index.php または http://www.unesco.kz/archive/hist.htm）を参照されたい。筆者は実見していないが、カザフ共和国最高会議人民委員部会や各省庁を初めとする国家機関に関す

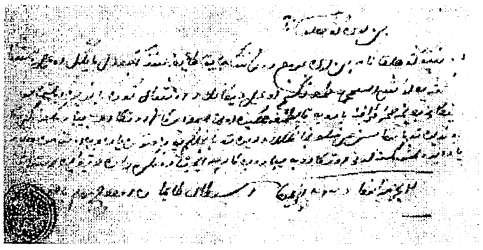
る文書が収められている。共産党に関する資料を収める大統領文書館 Архив президента でも並行して調査を行う必要があるだろう（Архив президента Республики Казахстан путеводитель, Алматы: Жеті жаргы, 2001 を参照）。その他にソ連時代の映像・音声資料も数多く所蔵しているようである。

当館所蔵史料をもとにソ連時代から史料集の刊行が行われてきたことも重要である。たとえば『18-19 世紀カザフ＝ロシア関係』（Казахско-русские отношения в XVIII-XIX веках (1771-1867 годы): сборник документов и материалов, Алма-Ата, 1964）などが基本的な史料集として知られ、近年ではボケイ・オルダ成立 200 年を記念して、ボケイ・ハン国関連史料集（История Букеевского ханства. 1801-1852 гг., Алматы, 2002）やイサタイ・タイマノフとマハンベト・ウテミソフ関連文書集（Исатай-Махамбет. документы 1801-1848, Алматы: Арыс, 2003）が編集されている。こうした当文書館の史料を利用した研究の動向については稿を改めて報告したい。

現在の文書館は、外国人にも開放され（現地機関の紹介状が必要である）、ノートパソコンを持込んで作業を行う研究者の姿も見られ、利用しやすい環境になっていることを報告しておきたい。すでにマイクロ化された 19 世紀の文書も、原本を請求し閲覧することも可能であった。複写についても、様々な制約はあるものの、原則として受け付けてくれるようである。

（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）





▲上：ジャンギル・ハーンからオレンブルク国境委員会への文書（1838 年）
◀左：イサタイ・タイマノフが発給したウラル河通行証（1836 年）